

外国語学習と言語環境

Speech Environments and Foreign Language Learning

付岡 京子 *

Kyoko Tsukeoka

序

日本人は、他国人とくらべて、英語が下手だとよく云われる。外国に住んでいても、日本人同志かたまって、現地人の中になかなか入っていかないとも云われる。受験戦争等、帰国後の事が気にかかって、心が日本に向いているからだと言われる。要因は種々あろうが、英語教育に携わっている者にとって考えねばならないのは、学校での英語教育が、時間をかけている割には、実際には役に立たないという指摘であろう。読む事は読めても、聴き取れない、話せない為に、実際に使えない英語しか学んでいないという事がいわれて久しい。

その為か、最近では会話主体の英語教育がもたせられ、日本の国際化、更には音響機器の進歩と普及に伴って、学生が英語を聞く機会は大いにふえている。又海外にも学生が気軽に行ける様になり、日本国内でも、外国人に接する機会がふえてきている。かつて謙遜が美德とされ、引込み思案だといわれた日本人も、最近ではかなり積極的になって、たとひ片言でも随分しゃべる様になってきている。完全主義で文法に拘り、なかなか口を開こうとせず、黙って唯微笑をかかべていたかつての典型的な日本人のイメージ

は、消えつつある。それでも国際会議の場等でのヨーロッパ人の言葉に対する臆しない態度に比べれば、概して日本人は、勿論例外はあろうが、まだまだ積極性に欠けている。以前にくらべれば、外国人が多数来日する様になってきているとはいえ、ヨーロッパの様には地続きでなく、海に隔たれた島国であるという地理的条件の下にあるので、ヨーロッパ等にくらべれば、外国人と接する機会が少ない。よく使われる「外人」という言葉に象徴される様に、外国人は大部分の日本人にとって、心理的に異質な存在の様に思える。その意味で、ヨーロッパ等とは言語環境がかなり異なる事は、否定できない。

1. 言語教育は音声面から

これ迄の英語教育が、文法を軸とした読み書き中心のものであった為に、その反動としてか、最近では会話中心が主流となってきている。聴き取れない、話せないという事は、役に立たない英語の典型として攻撃され、英語教育の目的が、片言でもいいから積極的に話すという事に、重点が置かれる様になってきている。歴史的にみても、確かに言葉は話し言葉から始まっている。書き言葉が出てきたのは、ずっと後になってからの事である。子供が言葉を覚えていく過程を

みても、話し言葉が先に来る。欧米では、言語教育はまず音声教育から始めるのが普通である。日本では、これ迄外国語教育において、音声教育の面が軽視されてきた嫌いがあるが、外国語教育を音声教育から始めるという事に、異論はないであろう。特に発音等は、外国語を習いはじめた時に正しい発音を覚えないと、時間的にも効率の面からいっても、非常な損失となるのではないだろうか。自分が正しい発音を身につけていないと、違った音を期待して聞く事になるので、簡単な文でも意味がとれず、聴解にも影響が出てくる。筆者自身大学に入って、初めて英語圏からみえた先生の発音を聞いて、どこの国の言葉かしらと思った苦い経験がある。大学に入ってから発音を矯正するのでは、極めて非効率的だと思う。

会話に上達する為には、まず聴き取れるという事が前提となる。かつて留学試験の面接等で、何か訊かれると分からなくて答えられなくなるので、訊かれる前にあらかじめ作文しておいた事をしゃべりまくって、難関を突破したという笑い話の様な話も聞く。しかし本来の会話は、聴き手と話し手の相互作用の上に、はじめて成り立つ。相手の言っている事が理解できなくて、適切な受け答えのできるわけではない。それ故、コミュニケーションの手段としての英語力をつけるには、聴解力の育成が必要条件といえよう。

2. 言語運用力向上の必要条件

聴解力をつける為には、何といても聴く機会を多く持たねばならない。日本人であっても、外国に育ち、日本語を聞く事なしに成長すれば、日本語がしゃべれない様に、我々は日常耳にする言葉を覚えていく。つまり言葉を身につける為には、その言語を浴びる様に聞く事が必要条件となる、日常的に浴びる様に聞く機会に恵まれていれば、自然と自己修正の機会も与えられる。日常生活の中で、試行錯誤の形で使う事をくり返す事を通して、言葉は自然に身につくものである。これが通常自国語を覚える時の自然

の過程であろう。それ故幼児は、聞くだけで一見いとも簡単そうに言葉を覚えていく。この様に我々は普通余り意識せずに、いつの間にか自国語を覚えてしまう。言葉の発達の上で何か問題がおこらない限り、言語習得過程が如何に複雑な過程であるかという事にさえ、気付かない事が多い。確かに言葉は、無意識な時、話し方を気にしていない時が、一番自然であるといわれる。話し方そのものを意識し出すと、言葉の流れがよどんでしまう事は、誰でも一度ならず経験している事であろう。吃音等はその典型的な例である。

自分の意志を伝えようとする際、我々は純粹に言葉だけで伝えているわけではない。通常狭義の言葉以外の要素が大きく働いている。言葉の発達過程をみても、一般的に言って、有意味語の出てくるのは、生後一才前後である。ではそれ以前は全然意志の疎通がないかということ、決してそうではない。おむつがぬれた時、お腹がすいた時、乳児は泣いて知らせる。不快の原因が取り除かれた時、快適な状態にしてくれた親との間に、次第に情動的なかわりが生じる。このような情動的な基盤がないと、子供は親の言葉に関心を示さず、情緒的言語発達遅滞、又時には自閉症といった症状となって現れる事は、臨床的によく知られている。

ところで、発音の基本は呼吸である。吐く息を使って上手に喉笛を鳴らす事によって、音を出す。呼吸のリズムにのって、泣き声以外の音を出す様になり、やがて発声の長さを変えたり、高さを変えたり、音声をいろいろに変化させる様になる。同じ音を反復させたり、唇の開閉、舌の運動等、調音器官の動きが活発になるに従って、いろいろな音を出す様になってくる。この段階では、日本語であるとか、英語であるとかの区別はない。どんな国の言葉にでも形成し得る可能性を秘めている。子供の言葉を書き留めようとする時、日本語の枠からはみ出た様々な音があって、書き止め難い事は、一度でもやってみた事のある人であれば、思い当たる事であろう。

ところで、日本語では母音は五つしかないが、英語ではその3倍以上の種類の母音を区別している。又、日本人はよく / r / と / l / の区別がつかないといわれる。しかしこういった事は、日本人が英語圏の人にくらべて耳が悪いというわけでもなく、又初めから五つの母音しか発音できないという事でもない。 / r / と / l / を区別せず、母音を五つだけもつ日本語という音韻体系の言葉を、四六時中聞く事を通して、次第に日本語の枠組の中に組み込まれていったという事であって、日本語にない音もいろいろ出している喃語の段階では、前述の様に、どんな国の言葉にでも組み込まれていける可能性を秘めている。日本人であるから日本語をしゃべるのではなく、日本語を聞いて育つから、日本語をしゃべる様になるわけである。尚、喃語の段階で、意志疎通にとって大事なものは、声の調子、抑揚、リズムといった超分節音素 (suprasegmental phoneme) であり、又、音声以外の表情、身振り等であって、語音そのものではない。

3. 日本語の語音

日本語の母音が五つであるとする定義は、静的な音声の把握法によったもので、明確に他と区別する音として使われられているという意味で、異論はない。しかし実際に発音した場合は、かなり個人差が出てくる。例えば「ウ」の音の標準的な発音は、平唇で、口の開きは狭く、舌の位置は後寄りであるとしばしば定義される。唇のすぼみがないという事で、英語の / u / , / u: / 等と区別して、発音表記にも / u / が使われる事が多い。しかし実際には、唇をとがらせる人、丸める人、全く丸めない人等、さまざまである。又単音で発音した場合と、単語の中で、文章の中で発音した場合とでは、同じ人でも自然と発音が違ってくる場合がみられる。しかし各母音には、日本語の他の母音と混同される事のない、その母音として容認され得る領域がある。この一定の許容範囲を示す領域を図に

したのが、伊里図表といわれるものであるが、これを見ると、1才の頃は五つの母音が未分化で、皆真中あたりにかたまっているが、2才、3才と年齢が進むにつれて分化していき、5才になるとほぼ重なりがなくなり、成人では全く別の領域に分化しているのがわかる。乳幼児の言葉が、「ア」だか「エ」だかわからなかったり、「ア」と「オ」の中間の様な音だったりして、曖昧な母音が多いのは、各母音が未分化で、接点が重なり合っているからである事が、みてとれる。つまり成人が区別して使っている各母音を、少差しかないほぼ同じ様な母音で発音している為に、前に述べた書き留め難いという事が出てくる。

母音の他に発達の初期に出てくる音は、両唇音 / m / , / p / , / b / である。これ等両唇の開閉によって発音すると定義される子音、両唇音は、日本語に限らず、どこの国の言語でも、早く出てくる音である。発達の早期に出る音の特徴として、構音運動が易しく、よく見える音、いいかえれば、目で見て真似し易いという事があげられるが、両唇音はこの条件にぴったり当てはまる。しかも周波数が低いので、耳で聞いて聴き分け易いという条件にも当てはまるし、言葉の中にひんぱんに出てくるという条件をも満たしている。しかし実際の発音に際しては、成人でも両唇をしっかりと閉じて発音しているとは限らない。マ行でも上歯と下唇で発音している女性アナウンサーがいるとの指摘もある。しかも誰もそれを異常な発音だと思わないばかりか、むしろ軟らかさに結びつくものとして受けとめられている向きもある。マ行、バ行で、両唇音と唇歯音の聞きわけ実験をすると、普通の人々の耳では区別がつかないという結果が得られたと、水谷は報告している¹¹⁾。

一方、統計的にみて、通常発達の後期になってから出てくる子音の代表は、日本語ではラ行、サ行、及びその濁音であるザ行である。ラ行は通常「弾音」又は「弾き音」といわれている子音である。即ち舌先で歯茎を軽く弾いて発音する。しかし水谷の調査では、「リ」、「ル」は

問題ないが、「ラ」、「ロ」、「レ」では英語の / l / と同じ側音として発音している人が、かなりいるという¹²⁾。英語が普及してきた影響であろうか。この様な構音法による音も、ラ行の子音として受け入れられる範疇のものであるが、幼児によくみられる舌先で弾かず、しかも舌自体余り動かさずに発音すると、「テレビ」が「テエビ」に、舌の代わりに唇を使うと、「プロペラ」が「プオペワ」に、舌先を動かすものの、柔らかく弾くかわりに強い破裂音にすると、「ライオン」が「ダイオン」になって、ラ行の範疇を逸脱してしまう、構音運動としての舌先の弾きは、結構難しいということであろう。

一方、サ行は子音の中でも最も周波数の高い音である為、耳で聞いた場合、聴き分けが難しい。出てくる頻度の高い音ではあるが、構音運動としても難しく、聴き分け難い音である為、通常年齢がある程度進まないと、出てこない音である。サ行の子音は、「シ」 / ʃi / を除いて、 / s / という音声表記で表わされる。この / s / の音の発音には、前歯から歯茎、硬口蓋とつながる面が、ある程度のカーブと空間的な広さをもつ事が必要であるが、幼児はこのカーブが浅く、空間が小さい為、しばしば中舌音の / ʃ / にかえて、「シャ」、「シュ」、「ショ」で発音する事が多い。所謂幼児音といわれる音になる。ちょっと見にはわからないが、形態的にも乳幼児と成人の構音器官は、この様にかなり異なる。もともと人間には、発音の為の構音器官が備わっているわけではなく、呼吸、咀嚼、嚥下といった生命維持の為の器官を発音の為にも使っているのであるが、発達途中にある乳幼児は、形態そのものがまだ完成しておらず、その上動きが未熟で、構音運動も不十分な状態にある。所謂子供っぽいしゃべり方、音色は、主としてこの形態の相異に起因する。クレリン (Crelin) とリバーマン (Lieberman) が、新生児、成熟したチンパンジー、ネアンデルタール人、成人それぞれの声道の鋳型をもとに、進化の面から、形態構造上の変化を検討した研究¹³⁾

は、よく知られているが、人間の子供と成人をくらべると、成人の場合は、口腔より咽頭の長さの方が長い、子供は逆に、口腔の方が咽頭の長さより長い。共鳴腔の長さも、大人より子供の方が短く、高音域に共鳴をもつ為、いわゆる瘠高い声が出る事になる。

ところで、日本語の発音の単位は拍であり、五十音のおよそ一文字が一つの拍と数えられる。アイウエオの母音を除き、日本語の各音は原則として、子音+母音で一つの拍が構成され、各拍の発音に要する時間は、およそ同じである。従って日本語では、子音だけが続くという事はないのが普通である。しかし、日常生活に於いて現実にもみられる構音では、子音+母音の組み合わせの中の母音が無声化して、次の母音に直接つながったり、脱落して促音化する現象が認められる。

日本語の語音というと、まず五十音図が頭に浮かぶが、長い歴史の中で日本語の発音そのものが変化してきていて、五十音図が作られた時ほどには、体系的でなくなっている為、五十音図は、日本語の現在の音声の実態をつかむのに、必ずしも有効とはいえないと、水谷は指摘している¹⁴⁾。本来日本語には、 / si / という音はなく、サ行の中でも「シ」だけは、 / ʃi / と子音部分に別の音声表記 / ʃ / が使われているが、英語の影響か、最近 / si / という音を使っている歌手もいて、この構音法も日本語として結構受け入れられている様である。

4. 音声言語としての英語の特徴

ところで日本語のアクセントが高低アクセントであるのに対し、英語は強弱アクセント、即ち強勢(stress)を軸とした言語であるという事は、我々日本人が英語の音声教育を考える場合、是非とも心にとめておくべき事である。日本語では、一つづつの拍がほぼ同一時間で発音されるのに対し、英語では、文強勢が語数に関係なく、時間的にほぼ同一間隔で現れる傾向がある。その為、弱音節の単語は、早目に弱く発

音されるので、その部分は物理的には聴き取り難い。まして日本語的な感じで、一つ一つの音と迄はいわなくとも、単語単位で、その単語単独で発音される場合の正しい発音を期待して聴くと、聞こえてこない。英語では、個別の単語の強勢の位置が、文の中に入ると変る事すらあるし、速度によっては音も変ってくる。それ故、個々の単語単位のばらばらな認識では、よく知っている単語すら聴き取れないという事がでてくる。

更に我々は、常にフィードバックで、自分の発音を絶えず耳にしているので、自分が日本語的発音をしていると、現実には聞こえてくるはずのないその音を期待して聴くので、尚聴き取れないという事になる。聾児の発音がおかしいのは、相手の言葉だけでなく、自分の出している音を聞く事ができない為であるといわれているが、自分の出している音をフィードバックで聞く事によって、自己修正が可能になるわけである。

ところが日本にいて外国語を学ぶ場合には、自分で余程意識的に聴く場を作らない限り、日常的な自然の状況では、自己修正が可能な程、英語を浴びる様に聞く機会には遭遇しないのが普通である。そういう地理的条件にある事を自覚した上で、英語での言語運用力を高める為の英語教育は如何にあるべきかを、考える必要がある。本稿では、学校教育の場にしばって、特に短大レベルでの英語教育を中心に考えていきたい。

5. 短大レベルでの英語教育

アセアン諸国からの留学生の話す英語が、説得力に富み、言語運用力に秀でているのに対し、日本人学生の話す英語は、極めて断片的で、しかも相槌的な意味あいのもので多い様に思えるとの体験に基づいた感想が、最近のJACET 通信にのっていた⁶⁾。同じ思いを抱いている英語教員は多いのではないだろうか。論理的なつながり、展開といった観点の欠けた挨拶の域を出

ない会話のみに終始していたのでは、真の言語運用力の備わった英語は、身につかないのではないかと憂慮される。

実際に言葉話す時は、母国語の場合でも、いつも完全な型の文章をしゃべっているわけではない。断片的に話したり、話の途中で新しい文に移ってしまったりする事がよくある。しかしそれは完全な文の型を知っているの上の事である。チョムスキー (Chomsky) は、言葉に関する知識あるいは言語能力 (competence) と、実際の言葉の使い方を意味する言語運用 (performance) とを区別して考えている⁶⁾、言語能力は十分あっても、現実にはこれが、いつも言葉として、完全な型で表現されるとは限らない。つまり言語能力の全てを言語運用面に出し切っているわけでないという事であろう。

一方、外国に行って、いきなり知らない外国語の中に放り出されると、絶え間ない音の奔流の中にいる様に感じられる。この様な場合、意味がつかめないのは、物理的に音だけは聴き取れても、単語もわからないし、その言語の性質や言語体系等を知らない為である。つまり、そこで使われている言語に関する知識に欠けているという事であろう。言葉に関する知識の裏付けなくして、真の言語運用力は育たない。

コミュニケーションの手段として、実際に使える英語をとという事が叫ばれて以来、音声英語から始めるという事が主流になってきている事は、喜ばしく、異論はないものの、反面読み書きの機会がへって、果ては文法無用論迄出てきたりするのを見聞きすると、最近はどうも言語に関する知識が軽視されている様に思えてならない。読み書きも又、コミュニケーションの大切な手段である事を忘れてはならないと思う。特に短大レベルになると、幼児の様に、唯聞くだけで言葉が自然に身につく様になる事を期待する事は難しい。年齢が進むにつれ、自意識が出てくるし、記憶のしかたも変化してきて、丸暗記が難しくなる。理解に際しても、翻訳という操作が出てきて、英語のまま頭にすっと入り難くなる。特に日本の様な地理的条件下にあっ

て、学校教育の場での英語教育を考える時、幼児が母国語を覚える過程を踏襲して外国語教授法として発展させた直接教授法 (direct methods), 即ち母国語の介入なしに学習すべき言語だけを使って教える方法にのみ頼る事は、余り有効とは思えない。

カナダの神経学者であり、神経外科医でもあるペンフィールド (Penfield) も、この直接教授法が有効な年齢は、4才から10才位迄であって、この年齢を過ぎると、直接教授法のみで学習効果をあげる事は難しくなると述べている。

The clean blank speech slate which he brought with him into the world is soon filled with, and after the first decade of life they can hardly be erased. They can be added to, but with increasing difficulty⁽⁷⁾.

レネバーク (Lenneberg) も通常左半球が担う言語学習が、右半球でとって代れるのは、2才から13才位迄であると述べており、ペンフィールドと同じく、脳生理学的に、自然の形での言語学習には、適齢期があるとみている⁽⁸⁾。

言語学習の適齢期を越えた場合、どの様な障害が出てくるかについて、ペンフィールドは次の様に述べている。

Instead of imitating the sounds of the new language, he tries to employ his own verbal units — his mother tongue units — and so, speaks with an accent, and even rearranges the new words into a construction that is wrong⁽⁹⁾.

つまり母国語の音素や言葉の単位に影響されずに、未知の言語に取り組む事ができなくなる。いいかえれば、母国語が日本語であれば、日本語的なアクセントや訛が出てきてしまうという事であり、日本語の枠組が定着してしまうと、英語を話す場合でも、日本語の影響を受けて、つい日本語的な音で発音してしまうという事であろう。発音の習得は、本質的に模倣によるものであるが、模倣の最盛期は4才から8才位迄であって、それ以降は低下の一途をたどると、

ペンフィールドは述べている⁽¹⁰⁾。

この事をふまえて、一般的に発音に関しては、年齢が低い程、その言語を母国語とする人と変らない発音ができる様になるという事がいわれており、それを裏づける様な実験報告も数多く出されているが (Donoghue 1968⁽¹¹⁾, Andersson 1969⁽¹²⁾, Asher and Garcia 1969⁽¹³⁾等), これ等の研究報告は移民を対象に行われたものが多く、成人がおかれている社会的な言語環境、即ち同郷の人々との接触が多い等の影響を無視できない事を考える時、必ずしも年齢差のみによるものとは言いきれないとの指摘もある。現にミネソタ大学のオルソン (Olson) とサミュエルズ (Samuels) が行った小学生、中学生、大学生各20人づつを被験者とした研究では、小学生グループより、中学生、大学生グループの方が発音の正確さにおいて優れており、中学生グループと大学生グループの間には、差は認められなかったとの報告も出されている⁽¹⁴⁾。

こういった結果を考えると、短大レベルで音声教育を行う事が、全く無意味であるとは思わないが、聴解力育成との関連からいっても、音声教育は、外国語学習の第一歩である事が望ましい。ペンフィールドも、年齢が進んだ場合、特に中学以上の学校教育の場での間接教授法の有効性を指摘しているが、その場合でも、それに先立って直接教授法が行われる事が望ましいとしている⁽¹⁵⁾。前にも述べた様に、ペンフィールドは直接教授法の有効性に関して、年齢的な限界を指摘しているが、特に言語環境を整えば、年齢が進んでからでも、母国人なみの言語を習得できる事を、具体例をあげて示唆している。英国の作家 Joseph Conrad として知られる Joeseph Konrad Korzeniowsky の場合である。

ポーランド人としてウクライナに生れたコンラッドは、シェクスピアにつぐ英語の達人との評価を受けた程の人であるが、コンラッドにとって、英語は母国語ではなかった。ポーランド語を母国語とし、幼い頃フランス人の子守からフランス語を話す事を覚えたコンラッドは、15才の時、英国船に乗って航海に出て、初めて英語

に接した。彼にとって英語は第二外国語であった。しかし英語は海上での唯一の言語であり、彼にとっては未知の言語である英語のみによる英語への導入、即ち典型的な直接教授法が行われたわけである。生命の危険にさらされる事もある海上生活で、心理的にも母国語を学ぶ時の状況に似ていたのであろうと、ペンフィールドは推測しているが、海上でのコンラッドにとって、英語は学ぶべき目的ではなく、英語をしゃべる事が生活そのものだったといえよう。尚ペンフィールドは、コンラッドにとって英語が第一外国語ではなく、第二外国語であった事、即ち幼い頃第一外国語のフランス語をすでに身につけていた事も、英語習得をより容易にした要因とみている。後に著名な作家となったコンラッドと親交のあった英国人から、ペンフィールドが直接きいた話では、コンラッドの英語の発音には、ポーランド訛もフランス訛も全然感じられなかったという⁶⁶。

脳生理学的にみると、自国語の形が完成する前に、自国語以外に一つでもその外国語だけが話される環境に身をおく経験が望ましいわけだが、現実には全ての人がこの様な環境に恵まれているわけではない。又コンラッドの場合、注意すべきは、直接教授法が学校教育の場ではなく、生活の中に持ち込まれているという点ではないだろうか。こういった意味で、学校教育の場では限界がある事を認めた上で、少しでも有効な方法を探っていかなければならない。

まず音声面についてであるが、特に聞くという技能に関しては、慣れているかどうか、大きく係わってくる。それ故、たとい意味はとれなくとも、まずできるだけ機会を求めて沢山聞いて、英語特有のリズムを体得する事が必要である。日本語と違って英語では、文強勢がほぼ一定の間隔でおかれる様になっており、聞き手はこのリズムを一種の手掛りにして、話の内容を理解していくと考えられている。それ故リズムにのらない話し方では、たとい文そのものは文法的に正しいものであっても、判ってもらえない事がある。筆者が学生の頃、1週間に一回

づつ講演の時間があり、特に入学したての頃は、さっぱりわからないのに、何で100分も座っていなければいけないのかと思ったものだが、後になって考えると、これも英語のリズムを体得するのに役立つ事を知らされたものである。本学においても、リズムにのって読んでいる学生にきくと、かなり積極的に聞く機会を求めて努力している。それ故、音声学の授業においても、個々の単語レベルでの練習に終始するのではなく、日常的に実際に使われている会話文を教材にして、できれば場面設定を背景に、聴解、発音共に練習の場を与える事が望ましいと考えている。

日本においては、片言の英語は氾濫しているものの、日常生活の中で英語を使う必要性があるわけではないので、かなり自ら積極的に聴く機会を求めなければ、日常生活の中で英語らしい英語を、ごく自然に学ぶ機会には恵まれない。しかし以前に比べれば、ラジオ、テレビ、テープ、ビデオ等、音響機器が大変普及してきており、学生に意欲さえあれば、音声英語に接する機会は格段にふえている。そのせいか最近では、音声英語に対する学生の抵抗は少ない。筆者等は聞いた時にわからなくとも、書かれたものを目にする、納得する事が多いが、最近の学生は、授業中ある話を聴かせて、内容の理解度を確かめるテストをした後で、同じ話をプリントしたものを配って、再度同じテストをすると、かえって得点を下げる者がかなり目につく。この事については、又別稿で詳しく報告したいと思っているが、どうも読む力が低下している様で、気になるところである。音声英語が英語教育にとって不可欠な事は云う迄もないが、それだけに終始してしまっただけでは、特に学校教育の場においては、片手落ちといわざるを得ないのではないだろうか。

今夏のLLA（語学ラボラトリー学会）国際大会で、中学や高校に最近ふえている外国人教師、いわゆるAETの役割についての討論会に参加した時にも、AET自らの中学や高校の英語教育における読む技能の重要性を強調する発

言があった。又関西学院大学の Jan Visscher 氏も、自らの体験を語り、英語は氏にとって母国語ではなく、英語を学び始めたのも、日本でいえば中二の時、即ち大方の日本人より遅く始めたにもかかわらず、現在英語に不自由しないのは、dramatic reading による所が大きいとの発言があった。

学校教育の場における読む技能の軽視は、長い目でみると、英語力の低下につながるのではないだろうか。音はうつろい易く、すぐに消えてしまうものである。日常生活の中で習慣化する程、使う機会に恵まれていれば、唯聞いたり、話したりするだけで、定着する可能性もあろうが、学校教育の場での学ぶべき科目という限界の中での英語を考える時、音声だけに頼ってでは定着しにくい。本学での経験ではないが、かつて英作文の授業で、かなりの量の読書を夏休みの任意の課題としていたが、毎年夏休み明けに、書く力がぐんとついている学生が何人かいて、きいてみると、夏休み中にかなりの量を読みこなしている事がわかった。音声面と合せて、読む事は語学の基礎といってもいいのではないだろうか。とりわけ年齢がいつている場合、読む事をぬきにしては、英語力の向上は望めないと思う。特にパラグラフの概念を頭において読む事ができる様になれば、断片的でない展開のある英文を身につける事ができ、ひいては説得力のある英語を話す事が出来る様になるのではないかと考えている。更に書く事を通して知識を整理し、確実にできれば、定着もたやすくなるであろう。書く事は又、手で覚えるという事につながる。この様に読み書きは、知識の定着に寄与するところが大きい。コミュニケーションの為の英語、即ち英会話、と短絡的に結びつけるのは危険ではないだろうか。読み書きも又、コミュニケーションの大切な手段である事を忘れてはならないと思う。

こう考えてくると、短大レベルの学校教育の場において、言語運用力のある英語を身につける為の外国語教育は、聞く、話す、読む、書くといった所謂四技能の総合の上にならなければならない。

可能になるといえよう。いいかえれば、話し言葉を含めた総合的なアプローチが必要であるという事であろう。教材も、実社会の動き、生活に密着したものを取り入れる事により、英語の学習そのものが目的ではなく、情報を得、知識を広め、考える為の手段となれば、運用力のある生きた英語が、無意識の内に自然と身につく様になるのではないだろうか。

総合的な生きた英語へのアプローチとして更に望ましいのは、英語劇ではないかと思われる。劇中では、人生の縮図ともいえる場に自己を投影できる。台詞を暗記するだけでも、外国語学習にとって意味があるが、登場人物になりきって感情移入し、超分節音素を駆使して、音声表現する事を要求される。その上即座の状況判断、表情、仕種等、いろいろな感覚を使って、全身で表現しなければならない。しかもその劇の書かれた時代的背景、文化の理解も欠かせない。ドラマを観賞だけでなく、実際に学生に演じさせる意味は大きいと思う。

注

- (1) 水谷修、「日本語の音声」、『講座言語障害治療教育』、4巻 構音障害、第一章、福村出版、1982. p.18.
- (2) Ibid. p.19.
- (3) Lieberman, P., Crelin, E.S., and Klatt, D.H., "Phonetic Ability and Related Anatomy of the Newborn and Adult Human, Neandethal Man, and the Chimpanzee", *American Anthropology* 74, 1972, pp. 287-307.
- (4) 水谷修, op. cit., p.15.
- (5) 井門義雄(愛媛大),「日本人学生の話す英語」, JACE'T 通信, No75, June 1990, p.1.
- (6) 今井邦彦,『言語障害と言語理論』, 大修館書店, 1979, p. 140.

Borden, Gloria J. and Harris Katherine S., 広瀬肇訳,『ことばの科学入門』(*Speech Science Primer*), MRS メディカルリサーチセンター, 1984, p.3 及びp.10.

- (7) Penfield, Wilder and Roberts, Lamer, *Speech and Brain Mechanism*, Princeton University Press, 1959, p.251.
- (8) Lenneberg, E.H., 佐藤方哉, 神尾昭雄訳, 『言語の生物学的基礎』 (*Biological Foundations of Language*), 大修館書店, 1974, pp.153-196.
- (9) Penfield, op. cit.
- (10) Ibid., p.243.
- (11) Donoghue, M., *Foreign Languages and the Elementary School Child*, William C. Brown Publishers, 1968.
- (12) Andersson, T., *Foreign Languages in the Elementary School*, University of Texas Press, 1969.
- (13) Asher, J.J., and Garcia, R., "The Optimal Age to Learn a Foreign Language" *Modern Language Journal*, 1969, 8, pp.334-341.
- (14) Olson, Linda L. and Samuels, S. Jay, "The Relationship Between Age and Accuracy of Foreign Language Pronunciation", *Child-Adult Differences in Second Language Acquisition*, ed by Krashen, et al., Newbury House Publishers, Inc., 1982, pp. 67-75.
- (15) Penfield, op. cit., p.252.
- (16) Ibid., pp.241-242.